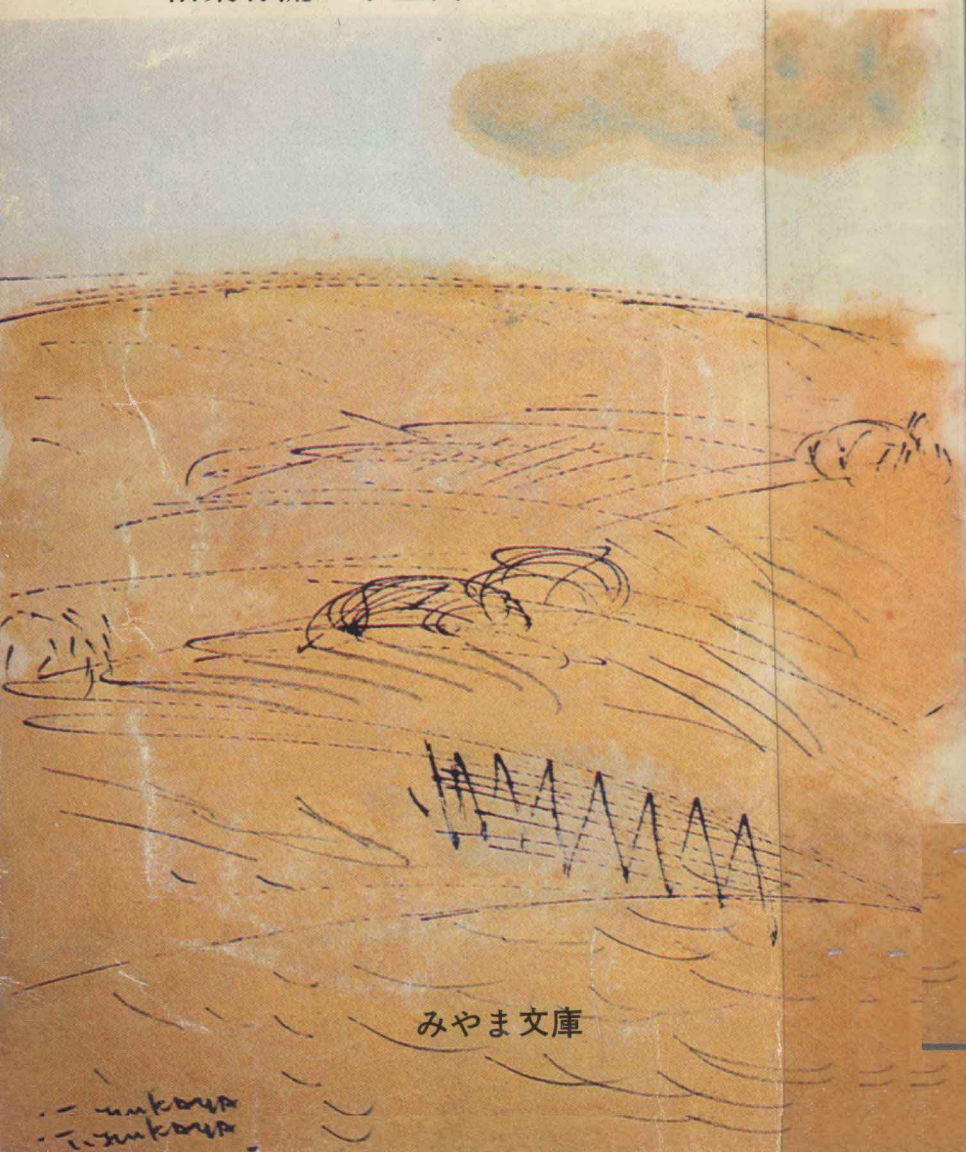


鬼城・零余子

相葉有流／中里昌之 著



みやま文庫

unkaya
unkaya

会 長 清水 一 郎 (群馬県知事)

副 会 長 山 川 武 正 (群馬県教育長)

同 相 葉 伸 (群馬大学名誉教授)

運営委員長 田 中 源太郎 (群馬県議会議員)

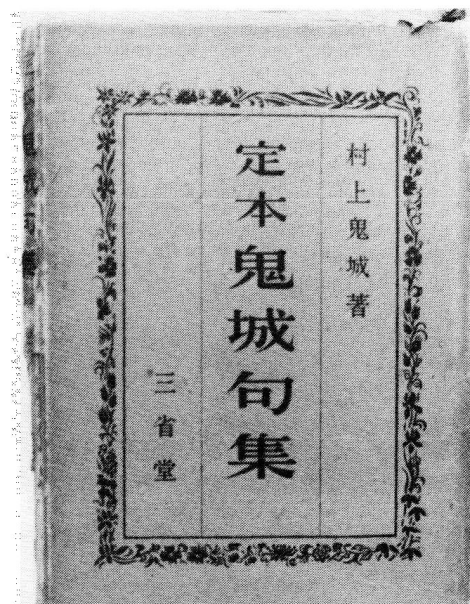
編集委員長 萩 原 進 (県史編さん委員)

事務局 長 関 俊 治 (県立図書館長)

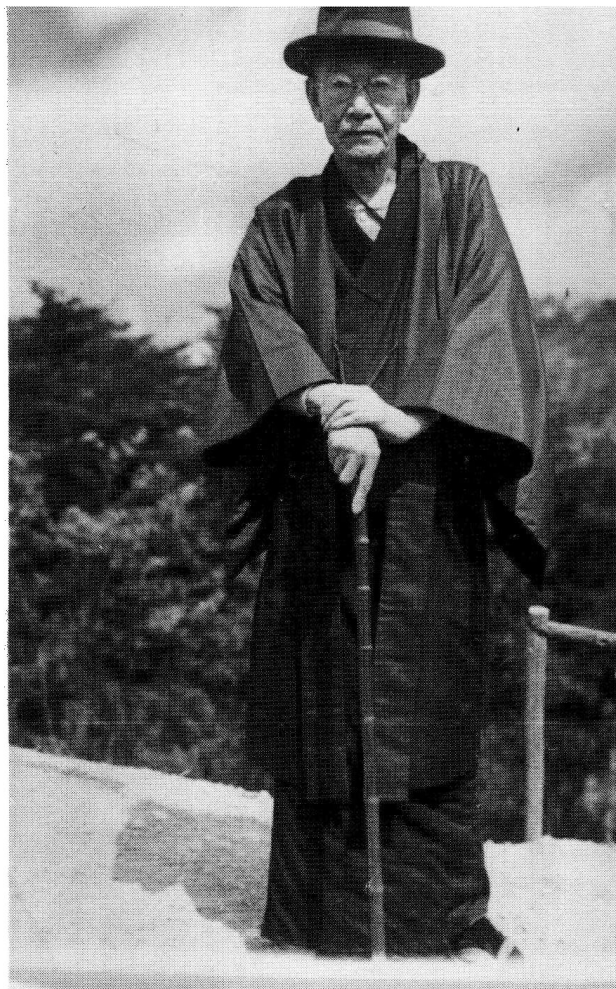


青年時代の鬼城 明治15

(村上家蔵)



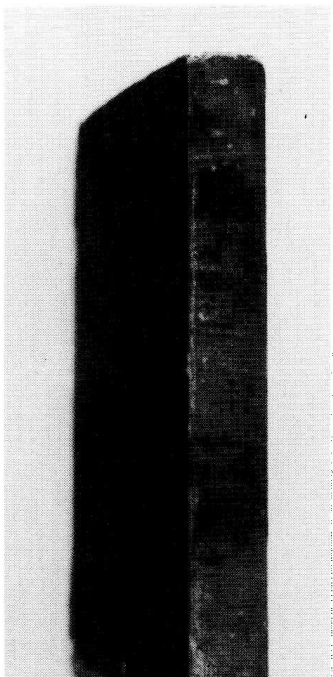
「定本鬼城句集」三省堂 昭和15・2 (中里蔵)



晩年の鬼城—高崎観音山にて

昭和12・4・18 73才（村上家蔵）

「鬼城句集」 大阪鬼城会
大正15・12（中里蔵）





選集「新俳句」民友社 明治31・3
鬼城の俳句を9句収録している(中里蔵)



鬼城遺墨

〈干鰯あふりてほろほろと酒の酔に居る〉

鬼城併題

(管谷竹雄氏蔵)

鬼城の墓 高崎竜広寺

〈碑銘〉青葙院常閑鬼城居士



鬼城句碑 沼田市沼田公園 〈越後路へをれまがる道や秋の風〉



鬼城句碑 高崎竜広寺 〈泉わくやとき高き高く吹きあぐる



鬼城句碑 高崎裁判所 〈新米を食うて養ふ和魂かな〉



苦学時代（20才頃）の零余子（富田泰氏蔵）

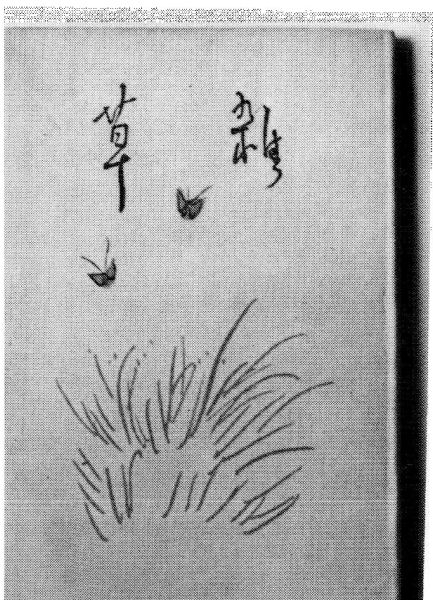


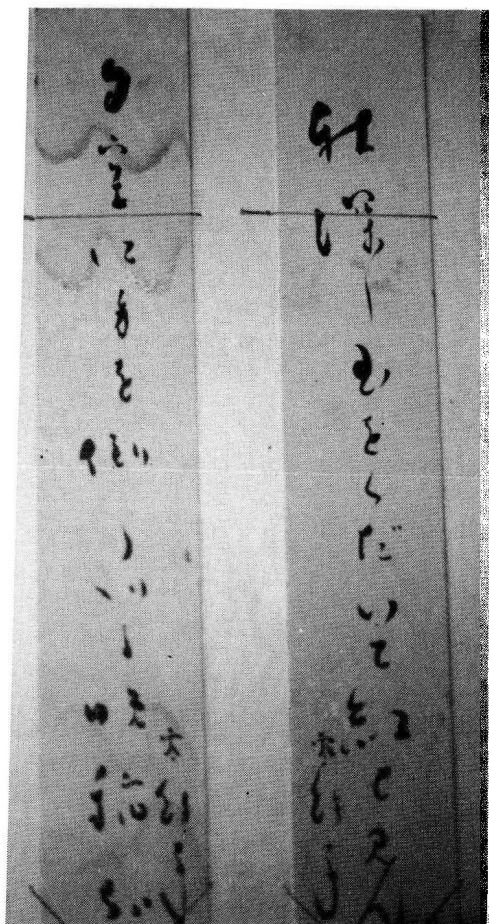
「枯野」創刊号 大正10・10（星野紗一氏蔵）

晩年の零余子
(富田泰氏蔵)



第一句集「雑草」 枯野社 大正13・6
(中里蔵)





零余子染筆短冊（篠木弘明氏蔵）

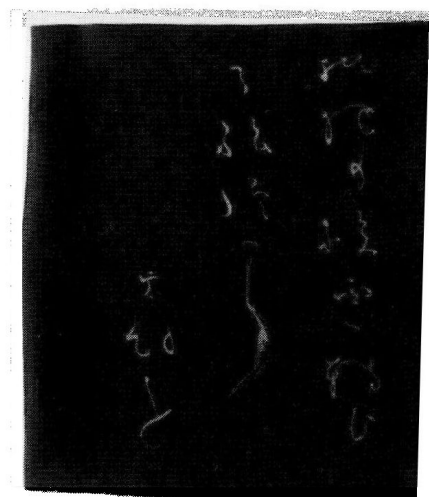
右〈秋深し玉をくだいて紅と見ん〉

左〈夕空に身を倒し刈る晩稲かな〉



「零余子句集第二」水明発行所 昭和7

（中里蔵）

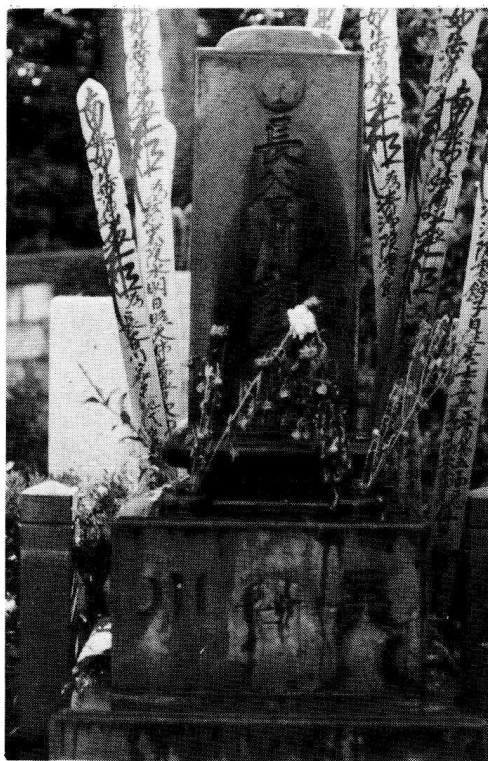


零余子句入御重掛（大沢亮啓氏蔵）

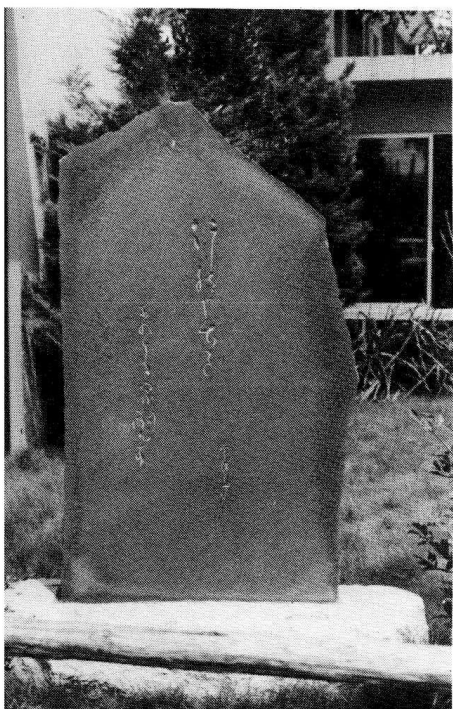
〈枇杷の核西へ転びて旅終えし〉



零余子句碑 多野郡鬼石町
 〈山水繚乱たり新芋生れけり〉



長谷川家の墓 東京都杉並区堀ノ内福相寺



零余子句碑 佐波郡境町公民館
 〈行秋や長子なれども家嗣がず〉

はしがき

近代俳句史上においては、大正期初頭に現出した「ホトトギス」第一期黄金時代のことはいかに名高い。その時代を支えた、十指に満たない花形作家のうち、一人は当時群馬県に在住し、他の一人は群馬県出身であった。すなわち、村上鬼城と長谷川零余子がそれに他ならない。本稿では、そうした有力作家を生み出すに至るまでの、群馬俳壇と「ホトトギス」との関係についてまず触れ、ついで鬼城と零余子を俳壇に登場せしめるに与かつて力あった高浜虚子と本県とのかわりを、地縁、血縁の両面から論じた。虚子の結婚とその周辺については、虚子自身も多くを語っていない。そのファミリー達も断片的にこれを知るのみで、現存者といえどもすでに記憶の圏外に去っている。今これを明らかにすることは、虚子伝の一部の空白を埋める補いともならば幸である。この部分の稿の執筆は相葉有流が担当した。

村上鬼城についてこれまで発表された文献類は相当数にのぼる。わけでも、浦野芳雄氏、

田島武夫氏、松本旭氏らの著作は、後人に裨益するところが大きい。しかし、本格的な鬼城研究は、その端緒についたばかりと言つてよい。本稿では、生活史的には青年期までの人間鬼城とその作品を育んだ環境に的をしぼり、さらに鬼城俳句の構造的理理解へと論を及ぼした。この部分の稿の執筆は中里昌之が担当した。

長谷川零余子については、その俳句立体論とともに、從來未究明のまま放置されてきたと言える。わずかに「近代文学研究叢書29長谷川零余子」(昭和女子大学近代文学研究室刊行)が、まとまった研究著作としてはほとんど唯一のものである。本稿では、業半ばにして逝つた零余子の出生地を確定し、さらに俳句立体論の拠つて立つところを可及的に闡明しようとしてつとめた。この部分の稿の執筆は相葉有流、中里昌之が担当した。

本稿を成すに当たり、鬼城については鬼城直門の田島武夫氏、同じく鬼城直門でかつ現在「石人」同人でもある室賀映字朗氏、代書人時代の鬼城の僚友鈴木勝一郎氏の子息菅谷竹雄氏、零余子については「水明」主宰星野紗一氏、同氏夫人明世さん、境町長光寺住職大沢亮啓氏、「水明」同人西条砂郎氏、群馬県史編さん調査委員篠木弘明氏、植木七郎氏からは貴重な資料の提供をいただいた。また、鬼城の嫡男村上信氏、同五女村上玉枝さん、零余子の

実弟富田泰氏からは、写真の提供をいただいた他、多くの聞書を得た。次に、虚子の第四女で「玉藻」選者である高木晴子さん、虚子夫人高浜いとうさんの従弟西村孤洞氏、遠縁に当たる横山彰之氏、深沢厚吉氏、同氏夫人しのぶさん、この他、前橋在住の松田徳松氏、田中暖流氏、岸善志氏、浦上勝重氏からは、虚子夫人の血縁またはその周辺について、得がたい聞書や資料の提供を受けたことなど、ありがたいことであつた。尚、中里は村上鬼城の研究について、飯田正一教授（大東文化大学大学院）のご指導を仰いだ。

本書の上梓に際しては、みやま文庫幹事小平房雄氏の格別の御骨折りいただいた。本書が成るのは、その他多くの方々の好意に満ちた力添えのお蔭である。併せて、心から感謝申し上げる次第である。

昭和五十四年二月

相葉有流
中里昌之

目次

はしがき

虚子と群馬

.....相葉有流

一 ホットギスの群馬流入

.....2

(一) 虚子の開花

.....2

(二) 倉田萩郎といなのめ会

.....7

(三) 鬼城と零余子の登場

.....11

二 虚子ファミリーと前橋

.....15

(一) 廃藩動乱期と大島家

.....15

(二) 虚子と大島いとの出会い

.....19

(三) 虚子ファミリーの地縁血縁

.....22

(四) いとの死

.....26

へ参考文献へ

.....30

村上鬼城

中里昌之

一家系

(一) 家系図

(二) 小原平右衛門

(三) 小原平之進

(四) 小原平之進の改名

(五) 村上源兵衛と村上(吉川)ヒサ

(六) 吉川平次郎(芝州)

二 生い立ち

(一) 生誕と東京在住時代

(二) 上州移住

(三) 学童時代

(四) 私塾修学時代

(五) 軍人志望断念と結婚

(六) 鬼城と深井英五	66
三 鬼城と上州	74
(一) 高崎の風土	74
(二) 街道宿駅文化と高崎	83
(三) 鬼城と自由民権運動	90
四 鬼城俳句の構造	90
(一) その二面性——大と小	96
(二) その二面性——生と死	101
(三) 鬼城俳句の易学的構造	107
五 鬼城の俳系	123
(一) 鬼城俳句の系譜	123
(二) 鬼城俳句の発生基層	129
〈参考文献〉	135
〈鬼城句碑一覧〉	136

長谷川零余子

相葉有流
中里昌之

一 家系図

140

二 出生地と肉親達

141

三 幼少年時代

146

四 上京、苦学

155

五 結婚、ホトトギス時代

159

六 「枯野」創刊、初期時代

168

七 俳句立体論

178

八 「枯野」中期以後と林間俳句学校

182

九 晩年以後

189

〈参考文献〉

193

〈零余子句碑一覽〉

194

表紙 深谷徹